

緊急事態宣言

いちかは ひろし
市川 浩

四月七日新型コロナウイルスの感染拡大に對處せむとて、改正新型インフルエンザ等對策特別措置法（以下特措法）に基く緊急事態宣言發出す。

これまでの経緯を振返るに、一月下旬中國武漢にてコロナウイルス問題擴大し、同市在住の日本人を緊急歸國せしむるに空路三便にて計566名中5名の感染者を確認す。WHO非常事態宣言前日の一月三十日新型コロナウイルス感染症對策本部の設置を閣議決定し、二月十六日その下部機構たる専門家會議第一回會議を開催す。乗客乗員約三千七百名乗船の豪華客船ダイヤモンド・プリンセス號の横濱港到着は二月三日にて同船にて發生のコロナウイルス感染問題は同對策本部の指揮下にありて、水際作戰として全員の海上檢疫を實施、三月一日全員の下船を完了、感染者712名、内無症状331名、死亡7名と云々。その後國內感染は一旦終熄を思はするにや、三月十四、十六日の三連休、折から早咲きの櫻花開き、各地に人出密集す。潜伏期間とせらるゝ二週間後の三月末より、感染者急遽擴大す。

この間、電視媒體は、緊急事態宣言を恰も魔法劍のごとく、待望の論一色にて、識者或いは歐米諸國の罰則規定を含む外出記禁止令を引き、或は宣言發令に伴ふ國家補償に言及して、我が國の對應遅しと咎む。斯くして宣言發出直後の輿論調査、宣言發出遅かりけりとするは70%を超ゆとす。さて宣言發出後實現せるは、個人間の社會的距離の八割減の目標及びそのための特定業種の休業要請にしなければ、假令法治國家なりとも、これらは「良う御座んす。我も俠氣あれば協力せむ」とて濟ますべき所なりと嘆ずるは、前の大戦に於ける「非常時」對應を経験せる當時中學生たりし老人の繰り言か。記憶を辿るに、戦局敗色濃厚の中にて新聞は「強力政治」を盛んに要望するも、戦後判明せるソ聯や獨逸に比べれば緩やかなる統制にして、米の配給は數回の遅配缺配を含むも、戦後まで維持せられ、祖國のために戦ひし軍人への恩給、原爆被害者への救恤など敗戦國としては望外の營みを得たり。これは國家として國民の協力を強制的に求むる緊急事態の發動は莫大なる後處理を要するが故に、輕々しうに野次馬的に扱ふものに非ざるを言ふなり。

更に問題は經濟に於ける個々の活動は血液の身體髮膚を潤すが如く、夫々國民の需要を満しをり、これらの一部を停止せしむる事、思はぬ社會的支障を生ずなり。然れど緊急事態下にて個別の變更は極めて困難にて柔軟性を缺く。更に一旦發令せる緊急事態の解除は極めて困難にて、本稿執筆中の今日現在、當初豫定の五月六日の解除は未決定なり。前の大戦前山本聯合艦隊司令長官は對米英戦に就き一年二年は存分に暴れて見させむが、長期化せば敗北必至と奉答せりと傳へらるゝも、實際は四年を過して停戦できず敗れ去れるを今更引くまでもなからむ。

今回の事案を「ウイルスとの戦争」と捉ふる向きあり。戦後七十年の今日、次の戦争は宇宙、細菌、情報戦の戦ひと言はれて久し。我が國は戦力不保持の憲法を有すと雖も、常に監視、研究を怠るべからざるに、從來これらをも憲法違反と言ひ立つる裁判長期化して實效有る對策検討もまゝならず。かくて新型コロナウイルス感染に對する醫療用資材の備蓄不足のみならず、生産態勢さへ既に國內に整備なしの現實、愕然とするも詮なし。

（令和二年四月二十八日）

（引用部の表記は地の文に統一）

（令和二年三月二十九日）